

報告2

古代山城と地域社会 — 備中鬼ノ城を中心に —

報告者紹介

亀田修一（かめだ しゅういち）

九州大学大学院文学研究科修士課程修了。大韓民国忠南大学校留学。岡山理科大学助手・講師・助教授を経て、現在、岡山理科大学生物地球学部教授。
主な著書・論文に『日韓古代瓦の研究』『日韓古代山城比較試論』『朝鮮半島古代山城の見方』など。専門は考古学。博士（文学）。

古代山城と地域社会 —備中鬼ノ城を中心に—

はじめに

岡山理科大学の亀田でございます。よろしくお願ひします。

僕は、「古代山城と地域社会」ということで、直接、鞠智城ではないのですが、多少参考にはなるのかなということで、岡山県の備中鬼ノ城というお城のお話をしたいと思います。

一 備中鬼ノ城

備中鬼ノ城は、現在の岡山県総社市というところにございます。古代の国で言いますと、備中國賀夜郡阿曽郷というところにあつたと考えられています。標高が三九七mの鬼城山に築かれた、城壁の長さが二、七九〇mの古代山城です。版築土墨、石垣、城門の構造、水門の構造、それから、角楼と呼んでいます、城壁から飛び出したもの、土墨の築き方、特に版築で堰板という板を使ってするやり方、その柱、その内外の敷石などに特徴があります。これらの特徴は百濟、高句麗、新羅、加耶地方の山城に見ることができます。西日本のほかの山城にも少しずつはあるにはあるのですが、これだけ

まとまっていることが鬼ノ城の特徴かと思っています。そして、これらが日本化しています。多様性と地元の技術の合体が見られるかと思います。

築城年代に関しましてはよく分かっていない部分もあるんですが、六六〇年の百濟の滅亡、六六三年の白村江の戦いの敗戦との関わりで築かれたと考えられています。六六七年に、岡山県の南側の香川県、讃岐の屋嶋城が築かれているんですが、それと比較的類似しておりますので、六六七年頃というのが一つのポイントとなるのかなと思つております。

(一) 備中鬼ノ城の遺構・遺物の概要

今回の発表では、備中鬼ノ城の築城、お城を築く時に地元の人々がどのように関わったのかということがあります。



図1 備中鬼ノ城 遠景

図1は平地部から見たところですが、山の稜線近くにはげているところがあります。これが城壁の線です。つまり古代にお城が築かれた時には、それなりに離れたところからお城の位置が見える、というのも特徴かと思います。それから図2は地元の

岡山理科大学教授 亀田 修一

山陽新聞社がシンポジウムを行つた時に作つたものです。大体こんなイメージではないだろうかと考えられています。左上の山の一番高いところから南側に降りてきた斜面にずっと土塁を巡らせています。これが朝鮮半島の山城の特徴になつております。細かいことを言いますと、5カ所に門があつて、建物があつて、谷部になつたところに堤でせき止めて貯水施設を作つています。お城を研究されている方はよくお分かりだと思いますが、お城は当然水がないとやつていけません。鞠智城でも同じように見つかっております。そういう意味でも類似した山城であることがお分かりいただけるかと思います。



図2 備中鬼ノ城 復元模式図 (2000.5.7山陽新聞)

きたいと思います。

(一) 仙台城のいみが特徴とその背景

ます 選地です なぜこの場所を選んだのか そして縄張 そこは本丸を「ぐ」と 一の丸をどこに作つて、どこに城壁線を作つていくのか、などです。これに関しましては、日本の弥生時代には高
地性集落であるとか、環濠集落であるとかありますので、お城は弥生時代からあるんだと思つておら

れる方もおられると思うんですね。これらは後の時代まで續かず、古代山城とはつながっておりません。古代山城に関しては新たに、朝鮮半島の人たちの知識・技術でできたと僕は思っています。そういう意味で、これらのお城づくりには専門の知識が必要になります。大野城、基肄城の築城に関しては、百濟からの亡命将軍または貴族たちがやつてきて、指導したことがわかつています。なぜここで選ぶのか。鞠智城も一緒なんですが、岡山の場合、鬼ノ城の麓に後の備中國の国府、お役所ができます。それから山陽道も目の下を通る。そういうことも大事な要素として選ばれたんだと思います。このような場所の選択に関しては、亡命将軍たちだけでもできないだろうし、渡来系の人々や地元の人たちだけでもできない。それらが重なつてできている、そんな視点で見てきます。

城門構造に関しては、懸門という、門に入る時に一段高くなるようなもの、それから平門といつて、そのままの高さで入るもののが両方にあります。花崗岩製の唐居敷と呼ばれるものがあります。鬼ノ城では、門に入る時に下に石を敷いております。こういうものはほかの山城ではあまり見かけません。それから水門構造。これも後から写真が出てきますが、九州の古代山城の場合、一般的には、水の出口は地面そのもの、高くてちょっとくらいなのですが、鬼ノ城の場合は外側の地表面から一～二mほどの高さ、つまり上から水が出るんですね、こういうものも特徴かと思います。角楼と呼んでいる、方形の飛び出しがあります。日本列島では対馬の金田城が以前から知られています。それから、城壁の築き方。これがかなり特殊なのですが、城壁、土の壁、石の壁もそうなんで

すが、城壁の内側に柱が入り込んでいるのです。これは、日本の古代山城では一般的に見られません。それから、もう一つ、版築。これに関しましても、ただ土を固めるだけなら一般の人にもできると思うのですが、少なくとも堰板（枠の板）を使用する。どのように枠の板を組み立てていくのか、という話になるとやはり専門家の知識が必要かと思います。そういう意味で、指導に関しては渡来系の人々がいたのではないかと思つています。具体的にどういう風に堰板を使用するのかにつきましては、後でお話します。

それから花崗岩。九州にもたくさんありますからご存じだと思いますが、花崗岩を本格的に、きちっと、きれいに加工するのは大体七世紀に入つてからです。飛鳥時代に入る頃で、これは渡来系の技術でいいだろうと思います。といいますのは、それ以前には、基本的に花崗岩を、このようにきれいに加工した技術はございません。

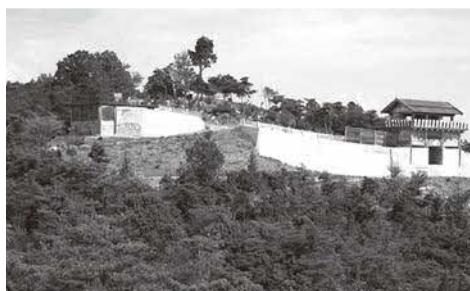


図3 鬼ノ城西門・角楼

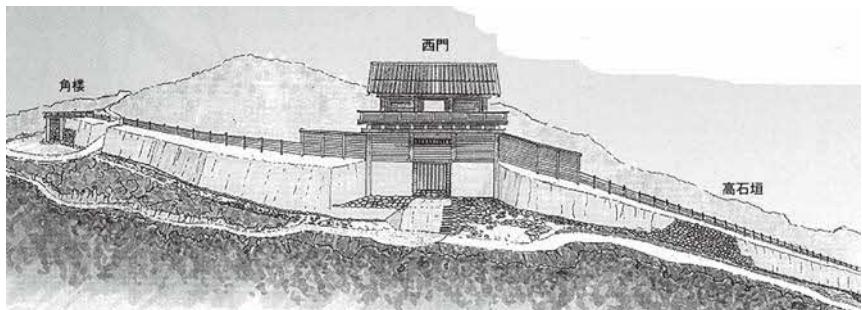


図4 鬼ノ城西門・角楼（総社市教育委員会提供）

それから、鍛冶場における鉄器製作。賀夜郡や下道郡というところが鬼ノ城の地元にありますが、この辺の鍛冶関係の人々が関わっているのではないかと考えています。

図3の写真ですが、ここに復元された西門があります。この左側に、方形の飛び出し、角楼があります。図4は絵にしたもので、真正面に西門がありまして、左手に角楼があります。方形の飛び出しがのところです。それから、右側に高石垣と呼ばれる石で積んだ部分がありますが、基本的には土のお城です。前面には石を多少敷いた状況が出ております。図5は西の門です。建物は復元ですが、丸で囲んだ部分の石敷は発掘当初のもので、おそらく七世紀後半代のそのままです。床面の石敷きは割つた石を使つていていますが、門の扉部分に関しては花崗岩の切石を使つております。図6は門の扉の右端のところですが、花崗岩を加工して柱を据える穴があります。ここには、方立てといつて、門の扉をギギギと閉めた時にすき間ができるないようにする材などを乗せるための穴を造つております。このように花崗岩をきれいに作るというのは、かなりの技術がいつたんだろうと思つています。



図5（上）図6（下）
備中鬼ノ城西門:花崗岩切石唐居敷・蹴放し・
石敷き床面・図5の手前が石階段

図7は北門です。懸門と言いまして、門の外と内側に、これだけの段差があります。ここにあるスロープは見学用に作ったもので、もともとはこのようなものはありません。約一・六mの段差があります。ですからこれは梯子を架けて登る門。簡単に言うとそういう話なので懸門とついています。

図8（中・右）は百済の都でありました扶余というところから東のほう、新羅との国境線近くの錦山栢嶺山城と言う山城の南の門です。これは石の壁で、見にくいのですが約三mの石の壁があり、その上の面が門の床面になります。つまりこれだけの段差がありますので、当然、梯子を架けないと登れないですよね。入りますと、壁にぶつかって左に曲がります。このように折り曲げて入るようにした門は、中世のお城にもありますが、実は鬼ノ城の北門にも同じ用に曲げて入らせる構造があります。このような知識に関しても、地元にたとえ詳しい人がいたとしても、ここまでできる人がいるかというと、いないと思いますので、やはり北門の造営には専門の知識を持つ



図7 備中鬼ノ城北門跡（懸門）



図8 備中鬼ノ城北門跡(左)と韓国忠清南道錦山栢嶺山城南門跡(中・右)の懸門・内甕城
(総社市2005『古代山城鬼ノ城』) (忠清南道歴史文化院2007『錦山栢嶺 山城-1・2次発掘調査報告書』)

た人が必要だと思っています。

それから、水門の高さの話を先ほど申し上げました。図9は鬼ノ城の第2水門と言っているところです。大雨が降るとこんな風に水が流れて出てきます。ここらへんで一mちょっとくらいですかね。このように第2水門では、石垣の上に土壘があつて、その土壘の中に通水施設を設けています。韓国でもこのような例はさほど多くはありません。図10は百済と新羅の国境線近くの忠清北道の沃川城・峙山城の水口です。水口までの高さは二m以上あつたと思います。

それから、角楼です。図11を見ていただくとわかるように方形に飛び出しています。特徴としましては、奥行きが1としますと正面の幅が2か3くらいで、正面のほうが長いんですね。このように正面幅が広いものは、百済のほうにあり、奥行きが長いと



図10
韓国忠清北道 沃川城峙山城水門跡



図11 備中鬼ノ城角楼跡



図9 備中鬼ノ城第2水門

と新羅や高句麗にあるのではないかといわれています。

図12は平壤の大城山城の城壁の写真ですが、縦方向にくぼみが見られます。このくぼんだ部分に柱があつたのです。このような構造の城壁は、基本的に日本の山城では見かけません。そのようなことから、この角楼部分にも、朝鮮半島の人が来て関わっているのだろうなと想定しております。

それから土墨の前面に石を敷いています。図13は鬼ノ城。図14は韓国の忠清北道の蛇山城です。ここも壁の中に柱の痕跡があります。この鬼ノ城の土墨にも縦方向の線が見えます。調査担当者の方も悩まれていて、まだ決定はしていないんです。このような縦方向の線が実は何本かあるんです。ここにもし堰板があり、棒で突いて土を固めると、土は水平じやなくて、すみっこが上がるんですね。この鬼ノ城のものは両方もとも上がっているんです。このような状況を見ますと、やはりここも堰板があつたのではないかと推測できます。こういうやり方は当時の日

本にはありません。

図15は一二五〇年の高麗時代のものですが、ソウルの西の方にある江華島のものです。同じように壁に痕跡があり、さらに上にも板の痕跡が残っています。これはその写真です。鬼ノ城がここまできちんとしていたかどうかは分かりませんが、こういう例がありますので、朝鮮半島と鬼ノ城の技術はかなり直接的につながっているのかなと思つております。

先ほど、花崗岩の加工技術の話をいたしました。花崗岩の加工技術は、飛鳥では確かに飛鳥寺、七世紀に入る直前に入っているわけですけれども、地方寺院では、そこまで古くはありません。図16は、下道郡の秦原廢寺というところの塔の心礎です。年代は七世紀前半です。現在の地名はまさに秦です。図17は秦原廢寺の瓦、右が山背広隆寺の瓦です。まさに秦氏に関わる寺です。今のところ、秦



図14 忠清北道禮山蛇山城跡の土墨の中の柱跡、前面敷石（車勇杰氏提供）



図15 京畿道江華玉林里遺跡上面堰板痕跡



図16 下道郡秦原廢寺塔心礎



図17
備中秦原廢寺（上）と
山背広隆寺（下）の瓦
(7世紀前半)
奈良國立博物館1970
『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術



図13
備中鬼ノ城第5墨状区間版築土墨・堰板痕跡?
そして土層端部の上がり
(総社市2005『古代山城鬼ノ城』)



図12 平壤大城山城城壁内の柱痕跡
(朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会
『朝鮮遺跡遺物図鑑』3 (1989))

原廢寺の瓦に一番近いのはこれでいいのかなと僕は思っています。ちょっと点珠のあり方は違いますが、類似する範囲を多少を広げても、大阪の四天王寺とか、そういうところぐらいしかございませんので、この瓦は秦氏系でいいのかなと思つております。このような花崗岩の加工技術でもつながるのかなと思つています。

(三) 備中鬼ノ城が築かれた地域

これまで鬼ノ城のいろいろな特徴と朝鮮半島との関係をお話しさせてきましたが、次は鬼ノ城の周辺にどういうものがあるのかという地図を作つてみました。図18です。たくさんありますて、ごちやごちやしてしまいました。賀夜郡阿曾郷、窪屋郡、下道郡、先ほどの秦氏の関係のお寺が分布しています。この辺の地域がずっと関わっているのではないかと思つています。

(四) いつ、だれが、どのように、備中鬼ノ城を築いたか

これらをもとに、西日本の古代山城を築いた人々について、鬼ノ城を中心にしてお話ししたいと思ひます。

四 いへたれかとのようには備中鬼ノ城を築いたか

まず発注者。作らせようとしたのはヤマトの王権、天皇でしょう。候補としては、この時期ですか
ら、皇極天皇（齊明天皇）、孝徳天皇、天智天皇、天武天皇、持統天皇、文武天皇くらいまででしょ
うか。僕は一番古いほうだと思っていますけれども。それから、選地、縄張、設計ですね。これは朝
鮮半島、主に百濟だと思いますが、百濟からの亡命貴族、將軍たちであろうと思います。それから、

白村江の戦い以前からこの地域にいた人も関わっていっているのではないかと思っています。それなりの知識がある人がいたと思います。

それから 具体的には施工する現場責任者 編 張図 などを作成した將軍たちが「こう作りなさい」と設計図をくれたとしても、現地で実際に仕事ができる人がいないとできませんので、現場監督も含めて、城づくりの知識を持つ、白村江の戦い前後の朝鮮半島からの亡命者たち、それ以前からの渡来人、その子孫たち、もともとのその地域の人々で、有識者などが現場監督になり得たのではないかと思つています。



図18 備中南東部の朝鮮半島関係遺跡分布図

器の生産だつたり、加工したりする人。そして大事なことです、石材の加工も当然必要で、石材の加工には鍛冶、鉄製品が必要で、木材の加工もそうです。それから土木建築、こういう技術は、在来の技術だけでできないことなども思いますが、ちょっと厳しいのかなと思います。

実際に作業する人たちが動員された地域としては、中国四国地方の場合、山城が築かれた地域は国単位でできていることが多い、国、郡レベル。瀬戸内海沿岸地域では各国に1ないし2カ所の山城が築かれています。実際の作業者は、少なくとも築かれた郡、当然近くから多く動員されたのではないかと思います。

特殊な技術は郡だけでは足りない場合が当然ありますから、国単位で最低考へてもいいのかなと思います。その時に注意すべきなのが、その地域の屯倉だと思います。国の直営地的なものです。吉備では五六九年、渡来人の王辰爾の甥の胆津という人物が、白猪屯倉の田部の丁籍（僕も詳しい読み方は分かりませんが、戸籍みたいなもの）を作つたという記事が出てきます。五六九年ですから、鬼ノ城築城より一〇〇年近く前です。この時に、戸籍を作つてこの地域にどういう人がいるのか、というのを確認した、みたいな話になるんだと思います。この戸籍が、山城築造の労働者動員にも関わってくるのかなと思つています。

もう一つ、吉備、この地域が恵まれてることとして「備中國大税負死亡人帳」という文書が正倉院に残されています。税金を納めずに亡くなつた人たちの記録です。これは七三九年の記録です。こ

の地域の人たち、先ほどの賀夜郡ですね、ここに庭瀬郷三宅里、忍海漢部、東漢人などの地名や人名が見え、阿蘇里に宗部里、西漢人などの地名や人名が見えます。明らかに近畿地方の渡来系氏族と関わるような名前の人たちが入つてきています。僕はこういう人たちとは、屯倉の設置後にヤマトから新たに派遣された人たちではないかと考えています。それも屯倉設置に関して入つて来たのではないかと考えています。そして「宗部里」は蘇我氏が絡むと言われています。まさに蘇我氏が屯倉設置に関わっていますので、こういう人たちが屯倉設置に関連してこの地域に来ていたんだろうと思つています。

今回の話を簡単にモデル化すると図19のようになります。三角形の頂部は、ヤマトの王権の発注で、実際の選地などは百濟の亡命将軍クラス。そして軍隊には工兵部隊というものがありまして、この人たちはかなりの土木技術を持つていると僕は考えています。そのような工兵部隊の責任者の人たちがやつたのが選地、縄張。ただし選地に関しては、地元の人の協力がないと難しいと思いますので、この辺の渡来系の人物も関わっている可能性は高いと思います。その人たちが現場監督も兼ねるみたいなことがあるなとも思つています。あとは技術者の

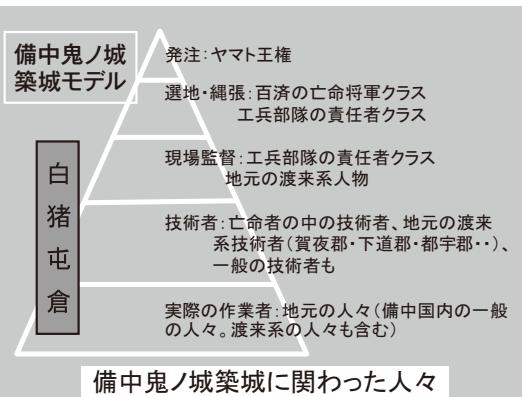


図19 備中鬼ノ城築城に関わった人々

中に渡来系の人も含めて、特に、地元、賀夜郡。この賀夜は、僕は朝鮮半島のカヤでいいと思っています。そして、下道郡、都宇郡。都宇^{つう}というのは港の関係なのですが、この付近は海上交通の要所になります。そういう人たちも関わっていると思います。そして、あとは実際に作業する人が必要です。この人々の動員に白猪屯倉が関係するのではないかと思っています。

二 備中鬼ノ城築城モデルからみた筑前大野城築城

資料編では大野城のことにも触れております。筑前大野城の築城に関しても、こういう見方をすると、まだまだデータは不足なんですが、ある程度推測できるようなこともありますので、鞠智城に關してもこういう見方をすればどうということになるのか、楽しみにしているところです。

〔図出典〕（いずれも一部改変引用）

図2：『山陽新聞』2000年5月7日記事

図4-9：総社市教育委員会提供

図8左：13右上下：総社市教育委員会2005『古代山城鬼ノ城』

図8中・右：忠清南道歴史文化院2007『錦山栢嶺山城－1・2次発掘調査報告書－』

図12：朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会1989『朝鮮遺跡遺物図鑑3』図85

図14：車勇杰氏提供

図15：中原文化財研究院2012『江華玉林里遺跡』

図17：奈良国立博物館1970『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術

その他：亀田作成